

高崎観光協会 会報

緑起のいいまち

高崎

春号
Spring
VOL.134

2016

高崎の「グラスメーカー」
木村 明
ぬくもりとシンプルさが魅力



高崎の「ガラスメーカー」木村 明

ぬくもりとシンプルさが魅力

柔らかく変化する陽射しと緩んでいく空気の緊張感。ガラスの器は、そうした季節の移ろいを留めるのにふさわしい。ビーチパラソルの下のカクテルグラスや縁側の麦茶のボトルなど夏のイメージがある反面、北欧などでは冬にガラスの容器を窓辺に置き光を感じて暖を取るなど、どちらかという冬イメージがあるという。

そんなガラスに魅せられてガラス製品をひた向きに作り続けてきた木村明さん。小さなガラス工房が誕生し始めた日本のガラス工芸の草創期を知るひとりだ。『高崎映画祭』の「女の人」をモチーフにしたトロフィーの制作者としても知られている。

■木村 明 (きむら あきら)

ガラス工房『NORTH WIND』
高崎市飯塚町 TEL : 027-361-6342

1952年、高崎市に生まれる。1976年～79年に月夜野町の上越クリスタル硝子(株)、1979年～80年に高崎市内の田島クリスタル硝子(株)に勤務。1982年～89年に安中市磯部に設立した『ISOBE GLASS WORK SHOP』で、小島誠氏と共に制作活動を展開。
1990年に独立し高崎市内に『NORTH WIND』を設立。
以降個展や展示会を通して作品を発表。

- 木村さんのガラス作品の一部は下記の店で取り扱っている
「TODOKORO」(高崎市榎物町107 TEL : 027-322-1766)
「うつわぬくもり」(高崎市並榎町195-13 TEL : 027-386-9070)
フルールド シュヴァルブラン
「Fleur de Cheval Blanc」(高崎駅 E'site 2F TEL : 027-310-8701)





おおらかさや温もりが 伝わってくるガラスの器

「ガラスのような…」という形容詞は、繊細ですぐに壊れそうといったモノや状態に使われることが多いが、木村さんが作るガラス製品を表現するにはあまりふさわしくない。むしろ、たっぷりとしたボリユーム感、落としても割れそうにないタフさ。ものによっては手に収まりきらない規格外のスケール感がある。

「普段手にするものには、もろさや危うさを排除した安心感がほしいという想いがあります。私の作るものは、エッジが少し丸かったり、全体的に厚みがあったりと繊細さに欠けるところがありますね」と、訥々と話す木村明さん。

軽・薄・短・小がモノに求められがちな今日あって、木村さんが作る容器は「無難に収まる」ことを知らない。けれど、大らかな温もりがあって使う人の心をほぐしてくれる不思議な力がある。『ちよっと大きいかな』と思いつながら使うタンブラーも、すっかり暮らしの中で愛用品の顔になる。

ガラスとの出会い。 手づくりの炉で、

自分らしい創作活動をスタート

木村さんは高崎高校在学中に、高崎駅西口のビルに開設されていたファンデーションギャラリーのガラス展で、淡島雅吉あわしま まさきち氏のガラス作品に心を揺さぶられた。そして、量産できる工業製品が好きだったこともあり工業デザインを学びたいと美術大学への進学を試みるが失敗。1976年に群馬県月夜野町の上越クリスタル硝子すいじょうに入社した。

「こうと決めたら、軌道修正がきかず、世間知らずで、思い込みが激しいのです。工場での仕事も入社して初めて、5〜6人一組で分業しながら製品を作ると知りました。体力もなく、思うように手も動かず、精神的にもつらくなりました」と、体調を崩して3年で退職。1979年には高崎市内の田島クリスタル硝子すいじょうに再就職し、ここで小島誠氏と出会った。



「1980年に東京国立近代美術館でヨーロッパのガラス展が開かれ、個人で仕事場を持ち制作している作家の出品もありました。工場の設備に頼らず個人でガラスが作れることを知り感激しました」。若い作家たちが小型の溶解炉を使ってガラスを素材に独自の創作活動を展開するアメリカと西ドイツ発の「スタジオグラスムーブメント」が日本にも伝播し、小島氏と木村さんは、作りたいものを自分のペースで作れる環境を求め退社した。

1982年。小島氏がノルウェーとデンマークで学んできた溶解炉のシステムを自分たちで設備し、安中市磯部に『ISOBÉ GLASS WORK SHOP』を設立。日本のグラススタジオワークの草創期を歩み始めた。当時はマーケットも拡大の一途で、旺盛な制作活動の中で確実に技術力を向上させるなど充実した時期となった。

1990年に木村さんは、高崎市内に『NORTH WIND』を設立し独立すると、個展を開いたりギャラリーなどが企画する展示会に出展したりと、木村明のガラスの世界を意欲的に発信し続けてきた。



高崎映画祭で受賞者に贈られるトロフィー

色や形を操りながらデザインを形にする 高崎映画祭に花を添えるガラスのトロフィーづくり

木村さんサイズの工房

木村さんの工房には、ガラスを溶かす溶解炉、長い金属の棒（ブローパイプ）を置いて回しながら作業ができるベンチ、成形した製品をゆっくり冷ますための徐冷庫が主な設備として配置されている。溶解炉と作業用ベンチの間は2メートルほど。炉でガラスを熱

するの、作業用ベンチで成形作業をするのも、体を反転させるだけで素早くできる。

木村さんは、溶けたガラスをブローパイプの先に巻き取り、その塊を引っ張ったり絞ったりして成形加飾していく「ソリッドワーク」という手法でガラス製品を作る。

何度も繰り返し体に染みついた動作には一点の迷いもない。ものさしや秤を使うわけでも、型に素材を流し込むわけでもないのに、見事な道具さばきでほぼ均一の丈や厚みの製品を作り上げていく。

手づくり感が温かい映画祭の トロフィーの制作現場

毎年3月末に開催される『高崎映画祭』は、市民ボランティアが支える手作りの映画祭。そこで受賞者の監督や俳優たちに贈られるトロフィーを、木村さんが制作するようになって22年目となる。

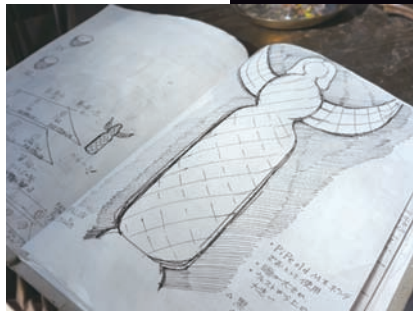
トロフィーは「女の人」・円柱・円盤から成り、今回、「女の人」の制作風景を見せてもらった。

800℃に加熱して柔らかくしたオパールの色ガラスを、ブローパイプの先に附着させて、内部の温度が1145℃の溶解炉で溶かす。このオパールに、炉の中のポットで溶けている透明ガラスを巻き付け作業用ベンチに移動。左手でパイプをゆっくり回し、右手でぬれた新聞紙をガラスの塊に当て、手のひらを使って形を整えていく。

もう一本のパイプを取り出し、溶けた透明ガラスを先端に巻き本体の軸にする。これにオパールの



色ガラスの原料





色ガラスを接合。オパール側のパイプを外し、開いた先端部分の口を洋バシで少しずつ広げ、裏返すように透明ガラスにかぶせていく。

一つになったガラス塊をステンレス台の上で転がして伸ばし、モールドという型に入れてスリット（切れ込み）を作る。再び台の上で転がすと、スリットがよじれて独特の模様になる。

胴体の形を整えたら、胸のくびれを作り、新しい塊を乗せて頭部を作る。新たに少量のガラス塊を二度に分けて左右から垂らして髪の毛に。次に、小さなガラス塊をパイプに取り、宙で揺らしながら伸ばして胴体に付ける。ハサミで翼をかたどり模様をつけ、左右対称に形を整えたら、切り口をバーナーであぶって丸みを出す。こうして成形が完了。パイプから切り離して徐冷庫に入れ、一日かけてゆっくり冷ます。

木村さんは、ここでやっと一息つける。汗を拭きスポーツドリンクで喉を潤す。一時間半にわたる全工程を休みなく突き進むには、相当な集中力と体力が必要だ。

ひた向きにガラス製品を作り続ける「ガラスメーカー」

「ガラス素材だけで作るシンプルなものづくりが性に合っています。ガラスは透明で嘘がないし、制作プロセスも見ての通りわかり易い。一時間程度で成形できるところも気に入っています」と話す木村さん。

「経験や技術の蓄積の先にこそ新しいものがあり、小さな発見を育てて形にしていくことに面白みを感じます」と、そこにガラス一筋に40年の原動力がある。

木村さんは、注文を受けたり、伝票を書いたり、製品を梱包し発送手続きもする。「一人だから何でもやります」と胸を張る。「電話注文の声を聞き、代金を払ってくれそうな人が瞬時に判断することも大切」と真顔で言いつて笑う。

肩書を尋ねられると木村さんは「ガラスメーカー」と答える。以前アイランドの女性からもらった名刺にあった単語だ。作家や職人という言葉にとらわれずガラス製品をひた向きに作り続けたいという木村さんの想いが伝わってくる。

第4回 榛名山ヒルクライム in 高崎

5月21日(土)・22日(日)

5月21日(土)

●タイムトライアルレース：10時～(榛名湖畔)

5月22日(日)

●ヒルクライムスタート：7時～(高崎市榛名支所)



最大勾配 14 パーセントの激坂に挑む

榛名の大自然に抱かれて約6,000人(昨年度実績)が疾走する自転車レース、通称「バルヒル」が今年も開催される。

コースは、榛名湖コース、榛名神社コース、初心者コースと脚力に応じて3コースがある。特に榛名湖コースは最大勾配14パーセントの激坂に挑むハードコースが最大の魅力だ。また初日に行うタイムトライアルレースは、受け付け開始22分で定員に達した人気レース。参加者は毎年増加しており、榛名地域は今やヒルクライムレースのメッカである。

バルヒルはボランティアの力によって支えられている大会だ。2日間でおおよそ1,500人以上の協力がある。参加者からは「地域のもてなしや応援が嬉しかった」という声が多く届き、榛名の魅力を内外に発信している。

※当日は交通規制があります。観戦は交通規制前にコース沿線のポイントへお越しください。

※参加者募集は締め切っています。
最新情報は公式ホームページをご覧ください。
<http://www.haruna-hc.jp/>

●お問い合わせ：榛名山ヒルクライム in 高崎実行委員会(榛名支所地域振興課) TEL.027-374-6715

EVENT

1等30,000円 総勢2,000名に
大型店4店舗共通商品券が当たる!

ガラポン抽選!

4店舗まわって
スタンプを押そう!



第8回 高崎商都博覧会 2016

大型店4店+「高カフェ」共同企画

4月23日(土)・24日(日)

●スズラン高崎店、高崎高島屋、高崎モントレー、ヤマダ電機 LABI 1 高崎

●押印期間：4月20日(水)～24日(日)

●押印場所：各店所定のレジにて実施

●抽選期間：4月23日(土)・24日(日)

●抽選時間：10時～19時

高崎商都博覧会は、高崎の大型店4店舗の共同販促企画で「高崎まちなか4店ぐるりんスタンプ大抽選会」が行われる。各店にて1,000円以上(1枚のレシート)お買い上げ毎に、スタンプ台紙に1個押印し、2店舗分のスタンプで1回抽選できる。3個集めれば2回、4個で4回、5個で5回の抽選が可能だ。

今年、まちなかオープンカフェ「高カフェ」との連携が新たな試みとして実施され、15店舗が参加し、飲食時に1個スタンプがもらえる。催事やポイント還元セールなども盛りだくさんの高崎商都博覧会。高カフェめぐりの楽しみも加わって、街はさらに賑やかになりそうだ。

あなたはどこでスタンプをゲットする?!



●お問い合わせ：高崎商都博覧会実行委員会(高崎商工会議所) TEL.027-361-5171

The event of spring of Takasaki

10回を迎えたバルにテント村が出現か!?



高崎バル 2016・初夏

6月9日(木)～12日(日)

- 中心市街地 (まちなか)
- チケットは5枚綴り
- チケット販売所: ラジオ高崎前広場、チケットマークの付いた店舗
- 前売り券: 3,000円 (当日券: 3,500円)



歩いて、食べて、新しい店や味を発見しよう!



「毎回、新しい店の発見が楽しみ」「みんなでワイワイ食べ歩きが楽しい」「後バルでまとめて豪華に食べる」等々、参加者の声が多々届いている。今年は10回記念のテント村も出現予定。

高崎バルがますます熱い!

バルとは、手頃な小皿料理を食べられる飲食店を指すスペイン語。2010年、高崎飲食業活性化協議会と高崎商工会議所が高崎を盛り上げようとスタートし、毎年初夏と秋に開催される。店ごとに特徴あるメニューを用意し、店舗の魅力も年々パワーアップしている。各店の意気込みも熱く、「バルのお客さんが常連になるなど、バルが浸透してきた」と笑顔の店舗も増えている。

元気なまちには、美味しい物が必ずある。ガイドブック片手に高崎の味を見つけてみよう!

● お問い合わせ: 高崎バル実行委員会事務局 (高崎商工会議所内) TEL.027-361-5171

EVENT

第28回 たかさきスプリングフェスティバル



4月29日(金・祝)

- 音楽センター前広場、市庁舎前広場、他
- 9時50分～ オープニングステージ

多彩なイベントで高崎の春を満喫する



高崎の春を楽しむ「たかさきスプリングフェスティバル」。音楽センター前広場でのオープニングセレモニーには、ぐんまちゃん他、人気のゆるキャラが登場予定だ。その後、花鉢・苗木の無料配布が行われ、八木節や獅子舞、お囃子などが披露される市民芸能祭へと続く。

新緑の中で琴の調べを聴きながらお茶を楽しむ野点コーナー、福祉団体を中心とした青空てんと村。木工細工や竹馬作りなど里山の楽しさがいっぱい「里山ひろば」。その他、フリーマーケット・食道楽・キッズわくわく広場・たかさきスプリングコンサートなど、多彩なイベントが満喫できる。

● お問い合わせ: たかさきスプリングフェスティバル実行委員会事務局 TEL.027-347-1686

EVENT

EVENT

高崎英学校

明治3年に全国に先駆け



◀高崎英学校は高崎市榎物町の一角にあった

内村鑑三の思想の原点。尾崎行雄らも学ぶ

●英語の達人・内村鑑三

明治時代に、日本人が英語で日本を欧米に紹介した三大日本人論として、新渡戸稲造『武士道（明治32年）』、岡倉天心『茶の本（明治39年）』、そして高崎ゆかりの宗教家・内村鑑三が著した『代表的日本人（明治41年）』の3冊が名高い。

内村鑑三はこの著作の中で、西郷隆盛、上杉鷹山ら5人の人物を取り上げ、日本人の精神性を海外に紹介している。日本文化を深く洞察するとともに、英語の文章力もとても高かった。内村鑑三はスバ抜けた英語の達人だったのだ。学生時代は英語漬けで鍛えられた。友人と英語で文通し、読書家だったので英語の書物も原文で読んだ。内村の英語の勉強は高崎から始まったのだ。

●高崎藩士の家に生まれ 藩学で学ぶ

内村鑑三は幕末の文久2年（1861）、高崎藩士の子として高崎藩江戸屋敷で生まれ、高崎で育った。キリスト教指導者、平和主義者として苦難に立

ち向って崇高な生き方を貫き、その思想には日本人の精神、武士道が重んじられている。

内村は10歳の時に、高崎英学校で英語を学んだ後、東京外国語学校、札幌農学校に進学、単身でアメリカへも留学した。新渡戸稲造と内村は札幌農学校の同級生で、2人はここでキリスト教の洗礼を受けた。

●全国に先駆けた高崎英学校

内村鑑三が学んだ高崎英学校は、高崎藩の最後を飾る画期的な学校といえ、明治3年（1870）に、高崎城のお堀の近く、榎物町の一角に開校した。藩主の大河内輝声（おおこうちてるな）が新しもので、官立の英学校が東京ほか全国7カ所に開校したのは、高崎英学校の3年後だった。ここに高崎の進取性、先駆性が現れている。港湾地域ではなく、内陸の高崎にいち早く創設されたことも特筆されるだろう。

開校の翌年、高崎英学校は、高崎城大手門前の藩校へ移されたが、内村鑑三は、柳川町の家から、ここに通って英語を学んだようだ。後に内村は「榛名碓氷の連峰を見ながら我少年時代の事共思い出した。（略）。小泉先生より

学びしABCが後に役に立って、日本全国にキリストの福音を伝えるに至ったのである」と、60年後の日記に記している。内村鑑三が60年間忘れられなかった小泉先生、小泉敬二はすばらしい指導者だったようだ。

●尾崎行雄ら傑物を輩出

高崎英学校には、高崎藩士の子息だけでなく各地から生徒が集まり、内村鑑三ほか日本を代表する傑物を数多く輩出している。筆頭は憲政の神様と呼ばれた大政治家・尾崎行雄。尾崎は父親の赴任で高崎に住んでおり、この英学校に通った。

高崎英学校は2年で廃校になってしまいが、鎖国を解いて世界に目を開いた明治時代、内村鑑三は、まさに時代の申し子として英語を学んだ。進取の気風にあふれた高崎の風土は、内村鑑三の原体験となったのである。

【内村鑑三関連】

内村鑑三の生家跡が柳川町に、内村家の墓所が光明寺（若松町）にある。高崎公園南の頼政神社境内の内村鑑三記念碑には、有名な「上州無智亦無才／剛毅木訥易被欺／唯以正直接萬人／至誠依神期勝利」の漢詩『上州人』が刻まれている。

